

文化 第80巻 第3・4号 一秋・冬一 別刷
平成29年3月25日発行

他者と恐怖—デリダのルソー読解—

小 原 拓 磨

他者と恐怖—デリダのルソー読解—

小 原 拓 磨

はじめに——言語の起源の問題

デリダは伝統的形而上学を批判したと言われているが、そのうち最もよく知られているものは「音声中心主義」の批判である。それは、^{エクリチュール}書字に対する^{パロール}声の優位という伝統の批判である。西洋形而上学の歴史においては、書字ではなく声がロゴス（神）をほぼ完璧に代表象する（音声ロゴス中心主義）。哲学はそれゆえこれまでずっと書字を不要なものとして還元する試みを続けてきた。こうした形而上学の内部にあって、デリダの観点では、「ルソーはおそらくエクリチュールの還元を主題化し、体系化したおそらく唯一の人あるいは最初の人である」¹。ルソーの振る舞いはそれゆえ音声ロゴス中心主義の典型的な防衛操作であり、ということは反対に、この防衛的所作を綿密にたどれば、そこで形而上学に抵抗し、あるいはそれを脅かす当のものが読み取れるだろう、とデリダは考える。

より正確に言えば、そうした「狭義のエクリチュール」（DG 186）の考察から見出されてくる、それより以前に現れているエクリチュール、「原—エクリチュール」（archi-écriture）こそがデリダの狙いである。というのも、まさしくそれが言語の起源だからである。伝統的形而上学が^{パロール}声を言語の第一のものとして特権化するのに対して、デリダはむしろ^{エクリチュール}書字を第一の場所に置く。「言語はまず第一にエクリチュールであり」（DG 55）、「差延あるいは原—エクリチュールがパロールそのものを開く」（DG 186）。

本稿では、『グラマトロジーについて』で展開される、こうした言語の起源を探究するデリダのルソー読解をたどってゆく。それはルソーの情念論をなぞりながら、他者との出会いの問題へと通じてゆく。一般にデリダの議論はエクリチュールの優位を主張するだけにとどまると見られがちだが、それは実際にはより深く、恐怖や死の問題と関連している。言語の起源における他者、恐怖、死の主題、それらを明示することが本稿の目的である。

情念と欲求

ポール・ド・マンは、デリダの『グラマトロジーについて』のルソー論に関して、次のように指摘している。

この著作はその公刊以来、多大な関心を引き起こしてきた。〔…〕にもかかわらず、最も活発な関心が向けられてきたのはソシュールとレヴィ＝ストロースに関する論争部であり、他方、『言語起源論』の読解の方はそれだけで本書の半分以上を占めているのにもかかわらず、注目されずに通過されている恐れさえある。しかしながらこの読解は、『グラマトロジーについて』の理論篇を補完する単なる例証やいわゆる「実践的演習」をなすどころではなく、実際には本書の中心である。本書の第一部は、デリダのルソー読解に対し細心の批判的注意を払わないでいる者には閉ざされたままであるに違いない。²

「訳者附記」で補説される通り、「一見したところ『グラマトロジーについて』の主要なモチーフは第一部に出そろっており、従来の見方では、第二部は、ともすると第一部で提出された理論的な図式や枠組みを適用した応用編ないし実践編であるかのようにみなされ、後回しにされることが多かった」³。これに異を唱える形で、ド・マンは『グラマトロジーについて』におけるルソー読解の重要性を指摘するのである。むしろそれこそが「本書の中心をなしている」、と。そしてド・マンによれば、「デリダのエクリチュール理論は情念の言語の比喩的本性についてのルソーの言明と密接に対応している」⁴。

「情念」(passion)のモチーフはルソーにおいてきわめて重要な位置を占めている。『言語起源論』第二章の最初の言葉（あるいは章題）からすでにそのことが言われている。「したがって、欲求が最初の身振りを命じ、情念が最初の声を引き出した、と考えねばならない」⁵。「最初の声」とはすなわち「言語の産声」であり、言語の起源が情念にあることをルソーは宣言している。デリダにとっての問題がエクリチュールでありかつ言語そのものである以上、ド・マンが言うように、ルソーにおける言語の起源としての情念はデリダにとって読解の中心的モチーフとなる。

「パロールが動物から人間を区別する」(OL 375; DG 260)——この宣言と共に『言語起源論』は開始される。パロールが人間を人間として特徴づけ、

その最初のもの、最初の声は情念によって引き起こされる。他方で、「欲求〔besoin〕は最初の身振りを命じる」。ここでデリダはルソーにおける二つの概念系列を見出す。一方に動物性、欲求、身振り、他方に人間性、情念、パロールがある（DG 260）。「声」は、動物性や欲求ではなく、人間と情念の側に位置する。「ルソーは言葉とパロールを区別しており」（DG 327）、パロールが人間的なものであるのに対して、言葉はもっと広い意味で使われ、（動物の）身振りや記号といった視覚的な合図まで含意する。書字はこの欲求や身振りの側に配される。「ルソーはエクリチュールを欲求の側に置き、パロールを情念の側に置く」（DG 340-1）。

より詳しく見てゆこう。人間的言語は身体的な欲求に由来するのではなく「精神的な欲求」すなわち「情念」から湧出する——ルソーがそう主張した当時、百科全書派やコンディヤックらが人間の精神活動と身体性ないし動物性との連続性を主張しており、それゆえ言葉もまたそうした身体的欲求から生じると一般に考えられていた。これに反対する仕方、ルソーは人間の精神性と身体性ないし動物性との断絶を強調し、言語は人間独自の精神性の発現であると考えた⁶。情念は欲求より人間的なものであり、それゆえルソーにとって言葉という精神的なものは、動物的欲求からではなく、人間的情念からこそ生まれなければならない。「あらゆる言葉一般は情念的欲望が身体的欲求を超え出るときに湧き起こる」（DG 310）。ここから一般に、『言語起源論』冒頭の議論は、言語は身体的な欲求から生まれたとする同時代の思想家たち（特に百科全書派やコンディヤックなど）の説に対する反論と見ることができ⁷、同様にまたデリダもそれを「たとえばコンディヤック流の神学—道徳論的な論点先取の過ちを避ける」ための議論とみなしている（DG 313）。ルソーは『言語起源論』を次のように書き出す。

パロールは人間を動物から区別する。そして、言語は諸々の国民を互いに区別する。ある人の出身地がどこであるかは、彼が話した後でなければ分らない。慣習と必要が各人にその国の言葉を習得させる。それにしても、この言葉が彼の国の言葉であって、他の国のものではないということは、何によるのだろうか。それを言うためには、地域的なものに関わり、習俗そのものに先立つようなある根拠にまで遡らねばならない。パロール——最初の社会的制度——はその形式を自然的原因にのみ負うている。

(OL 375; DG 312-3)

パロールを人間に固有な精神的産物とみなし、ルソーはその起源を地獄的なないし場所的な差異に求める。『言語起源論』において欲求と情念の差異は北方（寒帯）と南方（温帯）という地理的差異に変換され、北方の言葉は欲求の言葉、南方の言葉は情念の言葉として、それぞれの言葉の発生が探求される。それは言葉の「自然的な原因」に立ち帰ることである。ルソーは言葉の起源を説明するためにすでに社会を前提することを非難する⁸。「言葉以前に社会的制度は存在しない。言葉は数ある文化の一要素ではなく、制度一般の境位である」（DG 313）。言葉こそが社会的構造全体を構築する。したがって、社会のなかで言葉に先行するものは何もなく、つまり言葉の原因は前文化的あるいは自然的でしかありえない。

ルソーはもちろん絶対的起源を南方の情念の言葉として論を展開する。「ルソーは中心を宣言する。言葉の歴史の唯一の起源、その唯一の零一点が存在する、と。それは南方であり、生の熱気であり、情念のエネルギーである。[…]言葉は南方でのみ真に形成される」（DG 356）。南方が言語の根源的中心である。北方と南方は対称的ではなく、ルソーはあくまで南方の特権を宣言する。南方の情念こそはより起源に近い。温暖な地域の人びとは水を求めて井戸に集まる。そこで言葉が発生する。

乾燥した場所では、井戸からしか水を得ることができなかったのも、人々は井戸を掘り、あるいは少なくともその使用について一致するために、集結しなければならなかった。これが暑い地方における社会と言葉との起源であったに違いない。[…] 古いコナラの木の下で […] 人々は少しずつ互いに馴染んでいった。自分を理解してもらおうと努めて、人々は自分を説明することを覚えた。（OL 405-6; DG 371）

「おそらく『言語起源論』の最も美しい頁」（DG 371）と評されるこの詩的な一節で、上で見た第二章の命題——「パロールの最初の発明は欲求ではなく情念から来る」——が立証される。南方での起源の正常な秩序において、この命題は「絶対的に一般的な価値をもっている」（DG 319）。

パロールからエクリチュールへ

以上のヒエラルキー、形而上学の伝統的図式はお馴染みのもので、それゆえデリダはそこに揺さぶりをかける。もちろんエクリチュールに着目して。最初の声が情念から生まれると言われるかぎり、パロールは情念と南方に、他方、身振りとしてのエクリチュールは欲求と北方に属す。「エクリチュールは北方に在る」(DG 321)。そして、「ルソーは、欲求に対する情念の優位を実証しようとするとき、パロールを身振りの上位に位置づける」(DG 331)。現前主義として直接的現前を求めるとき、ルソーはパロールを称賛する。なぜならその現前は声の射程によってよりよく表象されるからである。このとき、エクリチュールはあくまでパロールの補助、その派生態であり、生きた声の息の根を止める死の担い手、「死んだ文字」(DG 29)である。こうした形而上学的振る舞いを採りつつ、しかし——ここからがデリダの注目するルソーであるが——ルソーは他方でこの派生物をパロールよりも評価し始める。

上で見たように、パロールは社会的で人間的なものであり、動物的なものではない。だがそれは言い換えれば、パロールは「自然」から離れた言葉である、ということでもある。自然主義者ルソーにとってそれは深刻な欠点である。ルソーにとって「あらゆる価値は絶対的自然に対するその近接性に従って規定される」(DG 332)。それゆえルソーはパロールよりも自然的な表現を探求する。

身振りの言葉と声の言葉はどちらも等しく自然的であるが、けれども前者はより容易で、慣習に依存しない。[...] 恋愛〔amour〕はデッサンの発明者だったと言われる。恋愛はまたパロールを発明したかもしれないが、しかしそれはあまり喜ばしいことではなかった。恋愛はパロールにほとんど満足せず、それを軽蔑する。言い換えれば、恋愛は自己表現のより生きた手段をもっている。あれほどの快樂をもって恋人の影を〔デッサンで〕なぞった彼女は、彼になんと多くのことを語ったことか！この棒の動きを表わすために、彼女はどんな音を使えばよかったというのか。(OL 376; DG 333)

今や重要なのは、音声ではなく「この棒の動き」、すなわちある種の身振りである。デッサンするその動きは、書いてある当の身体からも、書かれている最

中の、直接的に知覚された他者（の像）からも、切り離されていない。

〔棒の先端に描出される〕この像それ自身は、自らが表象しているものから完全には分離されなかった。デッサンされたものはそれ本人として、自らの影のなかで、ほぼ現前する。影の距離あるいは棒の距離はほぼ無である。今棒を手にして描いている彼女は、まさに他者そのものである⁹とする寸前のものに、まさに触れようとする寸前にある⁹。(DG 333)

このような「棒の動き」は、デリダによれば、「シニフィエさらには事物をそれそのものとして直接に与える記号」であり、「不可能な記号」である (DG 334)。ルソーはそうした描く身振り^{エクリチュール}を要請しているが、それはもはや「欲求の身振りというよりむしろ情念の身振り」(Ibid.)である。情念の表現として言葉ではなく身振りが称賛される。初めに想定されていた概念的二系列、すなわち一方に欲求と身振り^{エクリチュール}、他方に情念と言葉^{パロール}という対立的構図が動揺し、崩れかけている。今やこのデッサンの身振りは単に二次的で派生的なエクリチュールであるだけでなく、よりよく情念を表現し、同時によりよく現前を表象するエクリチュールでもある。

したがって、まさしく言語の発明と情念の誕生の後で、現前を取り戻すために、欲望は「…」棒の動きへ、指へ、目へ、言説を担った無言へと立ち帰る。「…」愛の沈黙の言語は前一言語の身振りではなく、それは「無言の雄弁」である。(DG 336)

注意すべきは、身振りに対するルソーのこうした二重の評価が矛盾ではないということである。ルソーはたしかに一方で身振りよりも言葉を評価し、他方で言葉よりも身振りを評価する。しかし、デリダが書いているように、言語の発明の前後ということを考えるならば、それは矛盾ではなく両義性であることが判明する。ルソーにとって、言葉という人間の精神的産物が生まれる以前の、欲求から生じる身振りは、言葉に劣る。けれども、ひとたび言語が発明され、慣習によって言葉が社会の制度となるやいなや、言葉よりも自然的な身振りへの回帰が欲望される。「自然的直接性は起源であると同時に目的である」(DG 332)。デッサンの身振りはそうした自然的で直接的なものであり、けれ

どもそれは「前一言語的身振り」すなわち言葉の誕生以前の動物的で欲求的な身振りではない。それは情念を表現する無言の身振り、情念の無音の言葉である。パロールの派生物としての通俗的エクリチュールではなく、ルソーにおいて「自然的なものへの回帰」として探求されたこの情念的表記、それがデリダの求めるエクリチュールである。

言語の起源

けれども、『言語起源論』第五章「書くことについて」^{エクリチュール}の全体は、そうは言っても伝統的な音声中心主義にもとづいた議論の展開であり、エクリチュールはパロールの付属物として副次的に扱われるにすぎない。パロールこそが上位であり、その最初の声は情念（南方）から産み出される。というよりも、ルソー自身の宣言に従って、そのように解釈するのがルソー読解の基本であり、また、そのように序列化するのが伝統であった。それゆえ、ここまで見てきたような序列の動揺は普通は軽視され、取り立てて扱われることもなかった。だが、その伝統的序列こそはデリダが疑問視する当のものであり、そして、パロールとエクリチュールの序列の動揺はデリダにとって決して偶然のものではない。したがって、デリダはルソーのそうした序列の宣言を考慮しつつも、他方で彼の記述、とくに今しがた見てきたような、情念的表記を通じて叙述されるエクリチュールについての記述を真剣に受け取る¹⁰。

たしかにルソーは書字を声に従属させ、声の誕生を言語の誕生とし、その起源を情念に位置づけることを宣言している。しかしながら、腐敗したパロールからの脱却として情念的身振りを探求するルソーの記述は、パロールの彼方、声と情念の彼方を指示している。したがってデリダの観点では

エクリチュールは、パロールとその情念的起源が問題となるまさにそれ以前に、現れていたに違いない。棒の動き […] は、「最初の声」を引き出す情念より以前のある情念を表現している。そしてこのエクリチュールは、それが欲求の言語として認められるとき、欲求より以前の欲求を言うことになる。(DG 339)

無言の雄弁としての身振り^{エクリチュール}は、パロールより直接的で自然的なものとして、パロールの起源（情念）より前に位置し、同時に、欲求の言語と呼ばれる単なる

動物的所作以上のものとして、欲求より前に位置している。このエクリチュールは、ルソーが音声中心主義的に措定する情念と欲求の対立の両方にまたがって、両者の境界線上に身を持している。情念的エクリチュールは単に動物的身振りでもなければ、人間的パロールでもない。あるいはそれは、もはや動物的欲求の表現ではないが、しかしまだ人間的情念の表現でもないという意味で、移行の契機である。情念的エクリチュールは自然的言葉から人間的言葉への通過路である。それは欲求以前の欲求の身振りであり、だが同時に、情念以前の情念の言葉でもある。そこで問題となっているのは、要するに、欲求と情念に分離する以前の、その両方であるような、動物的かつ人間的なある混合的感情である。デリダによれば、あるいはルソーの記述に忠実に従うならば、言語の起源はむしろここに位置する。

たしかに、ルソーは一方で情念が言語の産声を引き出すと定義し、言葉の唯一の起源、パロールの零点を南方に認定する。しかし他方で、後に見るが、ルソーは北方の欲求からも言葉が誕生することを示し、さらには情念的身振りとしてエクリチュールを称賛している。そうすると、たとえば「言葉の起源は北方と欲求にこそある」と言うべきだろうか。おそらくそれは厳密ではない。もしそのように反対の主張を唱えるなら、ルソーの宣言と矛盾し、その弁証法によって結局再び南方へと連れ戻されるだろう。したがって、デリダの結論としては、南方と北方はどちらも言語の起源ではなく、そうではなくて、その差異こそが言語の起源であるということに帰着する。

南方と北方とは土地のことではなく、互いに他方にもとづいて関係し合うことでしか現れない、抽象的な場である。言葉、情念、社会は北方にも南方にも属さない。それらは互いに次々交代し合う代補性の運動である。

「…」場所的差異はそれゆえ単に言葉の多様性に関わったり、言語的分類の基準であったりするだけでなく、それは言葉の起源である。ルソーはそう宣言してはいないが、すでに見たように、彼はそう記述している。(DG 378)

北方であれ南方であれ、人は言葉を話す。すなわち、情念だけでなく欲求も同等に言葉を産み出すのであり、したがって、どちらが言葉の真の起源であるか、もはや言うことはできない（宣言はできる）。結局、デリダの視点では、

そうした差異こそが言葉の起源であり、情念的身振りとしてのエクリチュールは、この差異がまだ明確に分節されていない地点の、欲求の言葉と情念の言葉の入り混じった表現であり、それはそのようなものとして言語の起源の最近に逗留しているのである。

より正確に言わねばならない。たしかに上で「移行」や「通路」といった語を使用した¹⁰が、実際のところデリダが言わんとするのは、初めに欲求の言葉や動物的身振りがあって、それから情念のパロールや人間的声が生じてくる、ということではない。それではルソーが反対した百科全書派やコンディヤックの言語生成論に戻ることになるだろう。ルソーが情念の書字に訴え、それを受けてデリダが主張するのは、そうした差異そのものが原初的だということである。ルソーが想定する概念的二系列、情念と欲求、人間と動物、南方と北方等々はどちらが先でも後でもなく、両者は同時に現れる。この差異が現れること、この差異が差異化することが、起源である。そしてこの二系列、この対立、この差異が現れるまさにその運動が、「原－エクリチュール」であり、「差延」である。この運動が、『《最初の声》を引き出す情念より以前のある情念」および「欲求より以前の欲求」に関わっている。

情念と欲求の混合——自己愛

ここからさらに言葉の起源あるいは原－エクリチュールの現場へと向かおう。それは情念と欲求の次元に関わってくる。

まず思い起こせば、そもそもルソーはパロールを人間的なものとみなし、その最初の声を情念に見出していた。『言語起源論』の出発点から、言葉は欲求ではなく情念から生じることが主張されていた。だが同時に、「パロール——最初の社会的制度——はその形式を自然的原因にのみ負っている」(OL 375)とも主張され、これによって早くも情念と欲求の二系列は動揺する。なぜなら、そのように言葉の起源を「自然的なもの」と考えるならば、情念を言葉の起源とみなすことは難しいからである。すなわち、情念と欲求の概念的二系列からすれば、情念はむしろ社会的で文化的であり、反対に、より自然的で前－社会的なのは欲求であるからだ。ここでデリダはルソー（のテキスト）に忠実に従い、両主張を総合する。「たしかに言葉は情念の本質に属しているが、その原因は——この原因とは言葉の本質ということではない——それゆえ自然に、すなわち欲求に属している」(DG 313)¹¹。

言葉は情念に属すが、その原因は欲求に属す。デリダによれば、欲求の主題は『言語起源論』の基底をなしている。ルソーは欲求を三つに分けているが、それらは究極的にはそのつど「第一の欲求」に取って代わられる。問題はしたがってこの第一の欲求であり、すなわちそれは生存と自己保存に関わる欲求——具体的には栄養と睡眠——である。そして注目すべきことに、この欲求をルソーは別のところでは情念として語っている¹²。この欲求とは要するに「自己愛」(amour de soi) のことであり、「絶対に原初的な情念、神が自己矛盾することなしにはそれを無化するよう我々に命令することのできない情念」

(DG 248) である。したがって、「欲求は情念のなかに恒久的な仕方ですっかりと現存しており」、それゆえ「もし情念の、社会の、言葉の第一の起源を説明したいのなら、第一番目の欲求の深みへと立ち帰らなければならないのである」(DG 315)。言葉は情念から発生するが、その情念は根本的には欲求と混じり合っている。情念と欲求の対立は起源的水準においては維持されず、動揺し、混合している。それは「第一番目の欲求」と呼ばれ、ルソーの言葉では「自己愛」と呼ばれる¹³。言葉の誕生はそこにかけている。

以上の洞察を踏まえながら、デリダはルソーによる寒冷な北方における言葉の誕生についての記述を読み直す。ここで再び注意すべきは、宣言と記述の二面性である。すでに見たように、ルソーは南方を言葉の起源として宣言している。けれどもルソーは、そのように宣言しながら同時に、北方における言葉の誕生を記述している。「ルソーは、北方もまたもう一つ別の起源である、と言わばやむを得ず認めている」(DG 319)。ルソーの「宣言」を潜り抜け、あるいはそれを無視して書かれているこのテキストを、この「記述」をデリダは忠実に受け取る。ルソーは南方を言葉の唯一の起源と宣言するが、同時に北方もまた起源であると記述している。南方では情念から言葉が発生したのに対して、北方では欲求から言葉が生じる。そして、デリダの読解では、「ルソーがそのときこの身分を認与しているのは死に対してである。というのも絶対的北方とは死であるからだ」(Ibid.)。

〔北方では〕幸福に生きることを考える前に、生きることを考えなければならなかった。相互的欲求は感情よりもはるかに上手く人間たちを結びつけ、社会は産業によって初めて形成された。絶えざる命の危険が身振りの言葉だけにとどまることを許さず、そして彼らにおける最初の語は愛し

て「*aimez-moi*」ではなく、助けて「*aidez-moi*」であった。(OL 408; DG 320)

貧困に対する緊急の欲求から、そしてなによりも命の危険という死の脅威に対する自己保存の欲求から、北方の人々は話し始め、社会を形成する。したがって、北方の言葉は欲求と利害関心に応じた技術的で計算的な言語であり、冷静で感情を欠いた言葉である。生のエネルギーに満ち溢れる南方の言語に比べて、「北方の言語は生き生きしておらず、賦活されておらず、歌わず、冷たい。死に対して闘うために、北方の人間は幾分早く死ぬ」(DG 321)。ルソーは、自らの宣言にもかかわらず、南方と北方の両方に言語の起源を認め、その発生を記述する。「北方の人間たちも、白鳥たちも、歌いながら死ぬことはない」(OL 416; DG 321)。

かくして、北方においてはまさしく第一の欲求が、すなわち生存と自己保存に関わる欲求が激しく活動する。それは自己愛と死の闘争である。問題は、まさしくここに言語の誕生がかけられていることだった。言語の問題、エクリチュールの問題がルソーを通じて「死」に触れ始める。

第一番目の欲求の深み

言語の起源を求めて、さらに深く潜らなければならない。ルソーはパロールが情念から引き出されると定義し、南方がその真の起源であると宣言するが、北方の欲求からも言葉が誕生することを記述する。デリダからすれば、そのように北方と南方という場所的差異が想定された瞬間にすでに言葉は誕生してしまっており、それゆえそうした差異こそが言葉の起源である。正確に言えば、北方と南方ないし欲求と情念という差異が差異化する働きこそが言葉の起源である。差異が今まさに現れようとしている情態、この言語の起源は、情念でも欲求でもない情動態、あるいは情念でも欲求でもあるような「第一番目の欲求」ないし「自己愛」の次元である。

デリダは、ルソーにおける二つの概念系列を挙げる段階で、すでに死について触れている。ルソーの言説においては一方に動物性、欲求、所作があり、他方に人間性、情念、パロールがあるが、デリダはそこに「この代補系列の主人一名詞「*le maître-nom*」」(DG 261)として死を認めている。すなわち、「死への関係、不安に満ちた死の先取り」(Ibid.)が、人間性と動物性の境界に身を

持っている。「人間的欲望と動物的欲求の差異、[…] それは死の恐れである」と書いてから、デリダはルソーの『不平等起源論』を引用する。

動物が〈世界〉のなかに認識する唯一つの善は、栄養、雌、休息であり、他方、動物が恐れる唯一つの悪は、苦痛と空腹である。苦痛であって、死ではない。というのも、動物は死ぬということが何であるのかを決して知ることはないからである。そして、死の認識および死の恐怖の認識は、人間が手にした最初の獲得物の一つであり、これによって人間は動物的状態から遠ざかる。¹⁴

ルソーに従えば、死（の恐怖）の認識は動物には備わっておらず、それは人間に固有のものである。「動物は[…] 死への関係をもたない」(DG 280)。してみれば、人間はこれの獲得によってこそ動物的様態から人間的様態へと移行することになる。他方で、それはまた子供から大人への移行としても考えられている。「同様に、子どもは《死の感情》¹⁵に開かれることで大人[homme]になる」(DG 261)。

ところで、言葉の起源に関して、ルソーはまた別の欲求について語っている。

ある人間が、感覚し、思考し、似る者としてある他者によって承認されるやいなや、この他者に自分の感情と思考を伝達したいという欲望あるいは欲求が、彼にその手段を探させた。(OL 375; DG 328)

他者とコミュニケーションしたいという欲望ないし欲求。ルソーはこの欲求も言語の端緒として示唆している。言語誕生の契機としての「他者との出会い」である。ルソーにとっては、そのようなものとしての他者との出会いとは、もちろん南方での出会いである。南方（情念）におけるそれはすでに見たとおりであり、すなわち人々は「水場」で出会う。人々は水場で出会い、「井戸を掘り、あるいは少なくともその使用について一致するために」(OL 405; DG 371)、言語という伝達手段を必要とした。そこではまた若い男女が出会い、愛を語らい、ルソーによればそこで「祝祭」が起こる。そして祝祭の後で社会が誕生し、より正確には、社会は「近親相姦の禁止」と共に成立する¹⁶。「ルソー

主義者」レヴィ＝ストロースが後に繰り返すことになる命題である。

デリダはひと通りルソーにおける祝祭と近親相姦の言説をたどった後、再びその発端となった「水場」の議論へと立ち戻る。たとえルソーが南方の情念から生じる言葉こそが真の言葉であると宣言するとしても、デリダの観点では、そこに欲求 (besoin) は不在というわけではない。ルソー自身がやはり記述している——「家畜を糧に生活している未開人たちはとくに、共同の水飲み場が必要〔besoin〕である」(OL 403; DG 377)。これをデリダは次のように読解する。

これは、水場は情念と欲求〔besoin〕の境界、文化と大地の境界に在る、ということである。水の純粋さは愛の火を反映する。それは「泉の純粋な結晶」である。しかし、水は心の透明さであるだけでなく、それはまた涼しさでもある。すなわち、身体は渇きにおいて水を欲求する。それが自然の身体であり、家畜の身体も、未開人の牧者の身体も水が必要である。「人間たちは火よりも水なしではやっていけない」〔OL 403〕のである。(DG 377)

ここで再び、デリダが諸々の起源を欲求のなかに探そうとした主張を思い起こそう。すなわち、「もし情念の、社会の、言葉の第一の起源を説明したいのならば、第一番目の欲求の深みへと立ち帰らなければならない」(DG 315)。第一番目の欲求とは自己愛であり、生存と自己保存に関わる欲求である。自己愛はそのように欲求と言われながらも、他方で「愛」であるかぎりではルソーにおいては同時に情念であり、とりわけ「絶対的に原初的な情念」(DG 248)である。人間は生存のために、自己を愛する情念から、水を欲求する。この第一番目の欲求あるいは絶対的に原初的な情念の深みから、言葉が誕生するだろう。「他者との出会い」を契機として。

絶対的恐怖

言葉は、その起源が欲求であれ情念であれ、あくまでその「表現」である。言葉は「代理物」であり、欲求そのものでも情念そのものでもない。言葉はそのようなものとして——通常の手字どころか声でさえ——ルソーが言っているように、我々から事物そのものを盗み奪う。それゆえ事物の現前を求めてル

ソーが「棒の動き」に訴えたことはすでに見たとおりだが、いずれにせよ、言語はそもそもの始まりから「比喩的」である。「最初の言語は比喩的であったに違いないこと」と題された『言語起源論』第三章、その冒頭でルソーは次のように述べる。「人間に語らせた最初の動機は情念であったから、その最初の表現は比喩であった。比喩的言語は誕生する最初の言語であった」(OL 381; DG 383)。最初の言語は比喩であり、情念の比喩であった。そしてルソーが最初の言葉として挙げているように見えるもの、それは「巨人」(géant)である。

ある未開人が他の未開人たちに出会うと、彼はまずは驚愕させられるだろう。彼はあまりの恐怖のために、この人間たちを彼自身よりも強く大きいものと見てしまうだろう。彼はその人間たちに巨人の名を与えることだろう。(OL 381; DG 391)

最初の言葉として「巨人」の語が発され、それはまさしく他者との出会いによって引き起こされる。もちろん、この未開人はその後、それら巨人たちに慣れ親しむにつれて、自身が与えた「巨人」という語の誤りを認めて、彼らと自分とに共通な別の名、たとえば「人間」という名を発明するだろう。

そしてこの語は最初の言葉として比喩であり、情念の表現である。言葉の起源としての比喩的言語の発現を把握するためには、「主観的情動へと立ち帰る必要がある」(DG 391)。「巨人」という語が表現している情動、それは「驚愕」(effroi : 激しい恐怖)である。「ある未開人が他の未開人たちに出会うと、彼はまずは驚愕させられるだろう」。「巨人」の語は、他者を前にして私が主観的に感じた恐怖の情念を表現している。

ルソーにおいてこの「驚愕」の情念は偶然やって来たものではない。それは、デリダだけでなく多くのルソー研究が認めるように、コンディヤックの『人間認識起源論』から来ている。コンディヤックにおいて「驚愕」は、大洪水の後に砂漠で道に迷った二人の子供の仮説のなかで語られる。彼らは自分に必要な物事について振る舞いによって伝え合っており、つまり発話はなかった。「たとえば一方は自分が驚愕させられた場を見ると、恐怖の記号となる叫びや動きを模倣して、他方が自分と同じ危険にさらされないように注意した」¹⁷。欲求が身振りの起源となることはルソーにおいても同様であった。そして、砂漠を彷徨うこの二人は、運が良ければやがて「水場」にたどり着き、そこで発話し

始めるだろう。しかし、ルソーはもっと原初的なところを考察している。すなわち、この二人の人間の出会いの場である。コンディヤックの仮説ではこの二人の人間はすでに会ってしまっており、しかし問題はむしろ彼らが出会った場面、あるいは他者に出会うというそもそもの出来事である。まさしくこの場面をルソーは先の「未開人」の物語で考察している、とデリダは見る。

他者との出会いは驚愕である。この情動は「欲求以前の欲求」(DG 339)であり、第一番目の欲求あるいは自己愛の情念、自己の生存を心配する感情である。「驚愕はそれゆえ最初の情念であろう」(DG 393)。驚愕の情念が言葉を発させる。上で、他者とコミュニケーションしたいという欲望ないし欲求が言語の端緒となることを見たが、ここに至ってそれは、より正確には、他者との出会いがまずは発声の端緒となる、ということになるだろう。そして「他者はまず最初に距離をとって出会う」(DG 393)。驚愕は人と人を離しておく。人と人を近づけるのは「憐れみ」(pitié)であるが¹⁸、そのように隣人として彼に近づいて話しかけるためには、まずはこの恐怖を克服しなければならない。「遠くからだ、彼は果てしなく大きく、脅威的な力をもった主人のようである」(Ibid.)。今や、デリダが何を言わんとするかが見えてくる。実際、デリダはすぐに続けてこう書いている。「これは小さき人間、幼児的〔infans : 話せない〕人間の経験である」(Ibid.)。

ルソーが言うように人間と動物を区別するものがパロールであるとすれば、パロールの発声こそが人間的であり、すなわち動物から区別される特徴となる。それはまた幼児の喃語が大人(人間)の言語に変化することでもあり、そのように、動物から人間への移行と、幼児から大人への移行が重ねられて語られていた。そしてここで未開人の仮説に従えば、幼児が他者と出会うとき、この他者は「巨人」として知覚され、幼児は激しい恐怖を感じて驚愕するだろう。未開人にせよ幼児にせよ、彼らは出会った他者を恐れる。他者は彼らの生存を脅かす恐怖であり、第一番目の欲求と自己愛に訴える「死」の恐怖である。「死の認識および死の恐怖の認識によって、人間は動物的状态から遠ざかる」とルソーは書いていた¹⁹。死の恐怖の認識が言葉を発生させ、動物を人間へ、幼児を大人へと変様させる。

他者への関係と死への関係——想像

パロールが動物から人間を区別するというこの命題が、ルソーの出発点で

あった。そして、最初のパロール、最初の声は情念から引き出されると言われた。今やこの最初の情念が何であるかが明確になり、すなわちそれは驚愕であり、他者との出会いにおいて生じる激しい恐怖である。ではなぜ他者との出会いが恐ろしいかと言えば、彼はまずは「巨人」として、「脅威的な力をもった主人」として出会われるからである。彼は私の実存を脅かす恐ろしい対象である。彼との出会いは私に死の恐怖を覚えさせる。したがって「他者への関係と死への関係は唯一つの同じ開けである」(DG 265)。この開けに投げ込まれ、未開人ないし幼児は言葉を発し始め、動物的状态から距離を取って人間(大人)へと移行してゆく。こうしたプロセスこそ、デリダがルソーから読み解く言語の発生論である²⁰。

言語の発生、他者、死の問題は深くつながっている。だがここで実際に重要なのは、それにいかにして対処するか、それにどのように応答するか、である。

絶対的恐怖とはそのとき他者としての他者との最初の出会いであろう。つまり、私とは別の者としての他者、自己自身とは別の者としての他者との出会いである。私が他者(私とは別の者)としての他者の脅威に応答できるのはただ、彼を(自己自身とは)別の者に変容し、彼を私の想像のなか、私の恐怖のなか、私の欲望のなかで変質することによってのみである。(DG 393)

他者を変質／他者化すること(alterer)。彼(女)を私と同じものではなく別のものとして、他のものとして変容すること。これによって、私は他者の脅威に対応する。ここでこそ差異が生まれる。そしてそれは「想像」(imagination)のなかで起こる。

「想像はその根底において死の関係である」とデリダは書く(DG 261)。想像において私は死の前に立たされる。動物と人間を分かちものが死の認識であるとすれば、その意味で、「想像が動物を人間的社会のなかに登記する。想像が動物を人間的類へと到達させる」(DG 265)。『言語起源論』においてルソーは「何も想像しない者は自分自身しか感じず、彼は人類の真ん中で独りきりである」(OL 396; DG 265)と書いているが、デリダの注釈ではそれは、想像しない者は他者としての他者の苦悩に開かれておらず、同時に死へ向かって自分

自身を超え出ていない、ということを意味する。想像しない者は、人間の形をしていても、まだ人間ではない。ルソーの秩序では彼はいまだ動物であり、あるいは未開人ないしは幼児である（「幼年期は、ある時は動物性の側に属し、ある時は人間性の側に属す」(DG 352)）。

動物はそれとしての他者の苦悩も、苦悩から死への移行も、想像しない。これこそは唯一つの同じ限界である。他者への関係と死への関係は唯一つの同じ開けである。ルソーが動物と呼んでいるものに欠けていると言われるもの、それは自らの苦悩を他者の苦悩として生き、かつ、死の脅威として生きることである。(DG 265)

動物にとって彼の苦しみは彼のものであり、そこから彼が他者の苦しみを想像することはない。また同様に、彼がその苦しみから自分自身の死を想像することもない。動物には想像が欠けており、それゆえ死の認識も他者の認識も欠けている。人間はそれができる、というより、それができて初めて人間となる。

想像はしたがって私と他者が近づくことを可能にする。想像において、私は私の苦悩を他者の苦悩として、あるいは反対に他者の苦悩を私の苦悩として、感じることができる。そこから「憐れみ」が生まれる。憐れみの感情がそうして人と人とを近づけることになる。すなわち、想像は憐れみに先立っている。憐れみは一般にルソーにおける根本的な人間感情として扱われるが、デリダの読解では、人が人を憐れむためにはまず想像が作動しなければならない。というより、ルソー自身がまさしくそう書いている。「憐れみは、たしかに人間の心に自然的であるけれど、それを作動させる想像がなければ、永遠に無活動のままであったことだろう」(OL 395; DG 262-3)。デリダはルソーのこの記述に従っている。想像が第一次的なもの、前一起源的なものとして、憐れみをその眠り込んだ無活動状態から引き上げる。

想像が憐れみを呼び起こし、人と人を近づける。それは言い換えれば、上でも見たように、彼らは初めは離れているということである。そして、憐れみによる彼らの接近より以前に、なによりもまず、彼らがその出会いにおいて感じている「恐怖」が解消されなければならない。デリダによれば、「私が他者（私とは別の者）としての他者の脅威に応答できるのはただ、彼を（自己自身とは）別の者に変容し、彼を私の想像のなか、私の恐怖のなか、私の欲望のなか

で他者化することによってのみである」(DG 393)。他者との出会いにおいて、人は死を想像し、自己愛の欲求から死を恐怖し、最初の言葉を発する。そして他方で、この想像と恐怖のなかでその他者を私とは別の者、他者へと変容させることで、この恐怖は解消される。すなわち、出会われた他者を他者として立て、自らの内部に感じられている恐怖をその他者へと帰す(他者化する)ことで、私はこの恐怖に対処・克服できるようになる。そのとき、恐怖は自己から区別され、差異化され、距離を置かれ、隔てられ、延期される。かくして私と他者の区別が立てられ、すなわち差異が誕生する。想像とはしたがって「差延」である。「想像は自己―触発としての差延の別名である」(DG 265)。想像において、他者と私は差異化され、脅威は延期される。それは「この脅威そのものに対する最初の防御であり、そして最も確かな防御である」(DG 222-3)。

おわりに

社会を構成する言語の起源には、差延としての想像が作動している。「言語は想像から誕生する」(DG 260)。絶対的恐怖としての最初の他者との出会いにおいて、私は自らの死を想像し、言葉を発する。想像はそうのように私を死に直面させると同時に、この脅威を私から差異化して遠ざけ、その到来を延期する。それは差延の操作であり、デリダが探求する「原―エクリチュール」の運動である。原―エクリチュールとは外部性との最初の出会いである。そこで言語が誕生し、内部(自己)と外部(他者)が区別され、隔てられる。エクリチュールがここで「原―」(archi-)と言われるのは、この場合のエクリチュールは語られた言葉の書き取りとしてのエクリチュールよりも根本的であり、むしろパロール／エクリチュールとしての言説そのものを可能にする当のものだからである。それは「言語の起源としてのエクリチュールそのもの」(DG 64)である。

以上の運動は、しかしながら、超越論的主観性のようななにか強固な審級によって成し遂げられるものではない。「想像」についての論述で、デリダは次のように書いている。

想像は、諸々の能力「すべてのなかで最も活動的なもの」であるかぎり、いかなる他の能力によっても目覚めさせられることはありえない。ルソーが、想像は「自ら目覚める」[s'éveiller]と言うとき、しっかりと反省さ

れた意味でその言葉を聴解しなければならない。想像は、自らに日の光を
 与える能力を自分自身にしか負っていない。[……] それは自らに疎遠だっ
 たり自らに先立つような何ものも受け取らない。それは「現実的なもの」
 によって触発されない。想像は純粋な自己触発である。想像は自己触発と
 しての差延の別名である。(DG 265)

一般的な意味での想像ならば、私が想像すると言えるだろう。けれども、こ
 こでの根底的な水準での想像は「自ら目覚める」。すなわち、想像する主体は私
 ではない。というよりむしろ私なるものはここで初めて誕生する。想像が目覚
 めるところとは、他者との最初の出会いであったが、「他者」が登場して初め
 て「私」も誕生する。「私」とは「私でない者」がなくては成立しないからで
 ある。「私は本質的に他者の他者でもある」²¹。「私」は他者から差延されて初
 めて誕生する。そして、他者との出会いから私なるものが誕生するとすれば、
 そこには当然「死」が介在しているだろう。他者と死をめぐる「私」の構
 成の問題、これの解明が今後の課題となる。

¹ J. Derrida, *De la grammatologie*, Paris: Minuit, 1967, p. 147. 以下 DG と略記。

² Paul de Man, *Critical Writings, 1953-1978*, Lindsey Waters ed., Minneapolis: University of Minnesota Press, 1989, p. 214. [「ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』のルソー読解」宮崎裕助訳、『現代思想』第四〇巻第一三号、青土社、二〇一二年、一八四頁、強調引用者。]

³ 宮崎裕助「訳者附記」、『現代思想』第四〇巻第一三号、一八八頁。なお宮崎は、ド・マンのこのテキストの翻訳に続く自身の論考において、『『グラマトロジーについて』のルソー読解の重要性とその射程を見越したうえで、徹底的な批評をなしえたのは、デリダにとってほとんど唯一ド・マンだけであった」と指摘している。(宮崎裕助「法のテキスト／テキストの法 ポール・ド・マンにおけるルソーの『社会契約論』のキアスム読解」、『現代思想』第四〇巻第一三号、二〇一二年、一九〇頁)。

⁴ Paul de Man, *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism* (1971), Minneapolis: University of Minnesota Press, 2^{ed}, 1983, p. 137. [「盲目と洞察」宮崎裕助・木内久美子訳、月曜社、二〇一二年、二三四頁。]

⁵ J.-J. Rousseau, *Essai sur l'origine des langues*, in *Œuvres Complètes V*, Paris: Gallimard, 1995, p. 380. 以下 OL と略記。

⁶ 増田真「ルソーにおける言語の問題」、桑瀬章二郎編『ルソーを学ぶ人のために』所収、世界思想社、二〇一〇年、二一〇頁。

⁷ 増田真、前掲論文、二〇九頁。

⁸ 「この哲学者〔コンディヤック〕が制度化された記号の起源に関して自らに提起する諸困難を解決する仕方は、私が疑問にしていること、つまり言語の発明者たちの間にすでに一種の社会が確立されていることを前提としているように見える」(J.-J. Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, in *Œuvres Complètes III*, Paris: Gallimard, 1964, p. 146)。

⁹ « Celle qui trace, tenant, maintenant, la baguette, est tout près de toucher ce qui est tout près d'être l'autre *lui-même* [...] »

¹⁰ デリダの観点では、『言語起源論』や『不平等起源論』などの理論的ルソーと、『告白』や『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く——対話』などの経験的ジャン＝ジャックという二面性が、ルソーにはある。ルソーのこの二面性を前にしてデリダは、「エクリチュールについてのルソーの経験と理論を一緒に考え、ジャン＝ジャックとルソーをエクリチュールの名の下に再びつなげなければならない」と考える (DG 207)。それがエクリチュールそのものの運動だからである。「ルソーは自分が言いたいことを宣言し〔déclarer〕、〔…〕自分が言いたくないことを記述する〔décrire〕」(DG 326)。

¹¹ 同様に、ルソーが未開人や自然人の心理を分析している箇所、押村高は「情念は欲求から起こる」と補足している(押村襄・押村高・中村三郎・林幹夫『ルソーとその時代』玉川大学出版部、一九八七年、一一七頁)。

¹² 「我々の情念は自己保存のための主要な手段である。したがって、それを破壊しようと欲することは、馬鹿げていると同時に無駄な企てである。それは自然を制御することであり、神の作品を改変することである。もし神が自らが人間に与える情念を破壊するよう人間に命じたとすれば、神は欲しつつ欲さないということになるだろう。神は自己矛盾することになるだろう」(J.-J. Rousseau, *Emile ou de l'éducation*, in *Œuvres Complètes IV*, Paris: Gallimard, 1969, pp. 490-1; DG 248)。

¹³ 「子供の第一の感情は自己自身を愛することである。そして第二の感情は、それは第一のものから派生するが、自分に近づく人々を愛することである」(J.-J. Rousseau, *Emile*, *op. cit.*, p. 492; DG 248)。前者は「自己愛」、後者は「憐れみ」を言っている。憐れみは一般に、ルソーにおける原初的情念とみられている。しかしデリダによれば「憐れみは自己愛の最初の派生物であり」(DG 248)、すなわち自己愛の方がより原初的である。

¹⁴ J.-J. Rousseau, *Discours*, *op. cit.*, p. 143; DG 261.

¹⁵ J.-J. Rousseau, *Emile*, *op. cit.*, p. 260.

¹⁶ 本論文ではこの命題についての論証はたどらない。近親相姦の禁止に関するルソーの論理展開とデリダの読解については、たとえば以下を参照されたい。廣瀬浩司『デリダ きたるべき痕跡の哲学』白水社、二〇〇六年、五六―六一頁。

¹⁷ Étienne Bonnot de Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, in *Œuvres philosophiques de Condillac*, Paris: PUF, 1947, p. 61; DG 395.

¹⁸ 「憐れみ」はルソーにおける他人愛の主要概念だが、ド・マンが指摘している通り、デリダはここで「《より早期の》情念として恐怖が憐れみの情に優先することを示し」ている（P. de Man, *op. cit.*, p. 134n. [前掲訳書、二四六頁]）。なぜなら、「憐れみは自己愛の最初の派生物である」（DG 248）からだ。すなわち、自己愛としての第一番目の欲求の方が憐れみに先立つ。

¹⁹ J.-J. Rousseau, *Discours*, *op. cit.*, p. 143.

²⁰ ド・マンは、しかしながら、そのようにルソーにおける言語の起源を恐怖とみなすデリダの主張に反論している。「ルソーの語彙において言語は情念の産物であり、必要〔欲求〕からくる表現ではない。そもそも恐れは、暴力と攻撃の裏面として顕著に功利的であり、『情念』よりは『必要〔欲求〕』の領域に属している。恐れはほとんど言語を必要としておらず、たんなる身ぶり手ぶりで表現されるのが最善だろう。〔…〕情念の可能性が、人間を動物から区別するのである」（P. de Man, *op. cit.*, p. 134. [前掲訳書、二三〇頁]）。ルソーの「宣言」に従うならば、ド・マンの反論は正しいだろう。そこでは欲求に対する情念の優位が保持されている。言葉は情念から産み出され、それが人間と動物を区別するだろう。けれども、デリダが言語の起源を求めて読解するのはルソーの「記述」であり、そこは情念と欲求の対立が曖昧になる境域である。ルソーの記述によれば情念からも欲求からも言葉は生じるのであり、結局、両者の対立、両者の区別が産まれるところこそが言語の起源である。差異の誕生が言語の誕生である。

²¹ J. Derrida, *L'écriture et la différence*, Paris: Seuil, 1967, p. 188.

L'autre et la peur : la lecture de Rousseau par Derrida

Takuma OBARA

Jacques Derrida a critiquée la métaphysique traditionnelle. Ce qui est le plus connu de ses critiques, c'est celle de le « phonocentrisme » qui est la tradition de la supériorité de la parole sur l'écriture. La philosophie essayait de réduire l'écriture comme un inutile depuis longtemps. Dans *De la grammatologie*, en lisant les textes de Rousseau, Derrida déconstruit cette tradition.

Ainsi, on dit que Derrida insiste le caractère plus fondamental de l'écriture que la parole contrairement à la tradition et c'est tout. Mais l'écriture derridienne n'est pas si simple bien sûr, elle concerne, plus radicalement, l'origine de la langue et l'autre. Derrida affirme, par ses lectures de Rousseau, que la langue naît de la rencontre avec un autrui.

Selon Derrida, la première rencontre avec un autre est un effroi. L'autre apparaît tout d'abord effroyablement. Il est une menace qui met ma vie en danger. C'est là que la langue naît. La langue apparaît pour l'existence, pour éviter la mort. L'écriture porte la mort.